

Title	聊齋民譚考
Sub Title	The folkloric analyses of Liao-chai chih-i
Author	藤田, 祐賢(Fujita, Yuken)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1969
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.27, (1969. 3) ,p.293- 316
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国語国文学・中国語中国文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00270001-0293

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聊齋民譚考

藤田祐賢

私は以前、「聊齋志異」(以下「志異」と略称する)の大部分の話が当時民間で語られた話を筆にのせたものであることを考証した。⁽¹⁾しかしそれらの話がどういふ種類の民間伝承だったか、ということ、すなわち、どの話が民譚(民間説話)か、口碑伝説か、あるいは世間話か、などということ、早急に判断するのがきわめてむずかしい。なぜなら、「志異」の話は、その内容は民間で語られていたときのほとんどそのままのものであるらしいが、報告者の手を経てきている上に、著者蒲松齡の創意によって再構成されたり、きわめて高度の芸術的表現が施されているために、民間伝承の原形そのままではないものもかなりあるだろうし、さらにまた民間伝承そのものが複雑な性質——たとえば民譚の伝説化、伝説の民譚化、民譚の世間話への混入、一つの説話と他の説話との習合、等々——をもったものだからである。なかには「趙城虎」(2)(カッコ内の数字は十六巻本の巻数。以下同じ)、「蘇仙」(4)、「張老相公」(4)、「金姑夫」(4)のように、一つの特定の樹木や社祠などに結びついていて、たゞちに伝説だと知られるものもあるが、そのほかの多くは、その民間伝承としての種類を判定することに困難を感じる。たゞ「志異」の話でほかにそれときわめて類似した話がある場合には、それらと比較検討することによって、民間伝承としての型式とか変化とか流伝とかの状態を多少なりとも知ることができると思う。この論文で

は、数は少ないけれども、「志異」の話の中のそのようなものを取りあげて、このすぐれた怪異小説集に対する民間伝承的考察を試みてみたいと思う。それは文学としての「志異」を考察する場合にも大いに考慮に入れるべき重要なことだからである。

附記：厳密な意味では、伝説は話（説話）の中には入れることはできないと言われているが、本論文では、便宜上、民間の話の中にに入れてあつかうことにする。

一、「志異」以前の話との比較

「志異」には従来、史実譚とみなされている話が多くつかある。しかしそれらの中には、古くから伝承されている民譚があるように私には考えられる。たとえば「姉妹易嫁」(3)は明の毛文簡公の夫人の物語であるが、趙起杲の「例言」には事実あったことと言っているし、またこの篇の後には、毛氏の碑表に篇中の事蹟と同じことがしるされている旨、附言されている。ところが宋の「南部新書」にこれと同じ話が見られる。すなわち、吉頊という人の父親が冀州の長吏をしていた時、南宮鼎丞の崔敬の娘をわが子の嫁にしようとするが、娘が承知せず、その妹が姉に代って吉頊のもとへ嫁ぎ、後に吉頊は出世して宰相になった、という話である。「南部新書」から「此の話を引いている「茶香室三抄」の著者も、「此を觀て乃ち知る、此等の事、古に已に之有り、と。」と言っているが、これはおそらく妹がいやがる姉に代って嫁にゆき幸福になるという型式の民譚があって、それが史実譚化したものではなからうか。とくにこの型式はモチーフの点で蛇郎譚のそれと共通するものがあり、民間伝承としての色彩を濃厚に呈しているものと考えられる。

「続黄梁」(5)を読む人はだれでも、この話が唐の沈既済の書いた有名な「枕中記」と類似した話であることに気づくだろう。曾孝廉が礼部の試験に合格して得意になっていたが、ある寺に行った時にみた夢の中で、自分が宰相となって榮耀榮華をきわめて権勢をふるう。しかし専横のために弾劾され、ついに位を剥脱され家財を没収され、配流の途中で盜賊にあって殺されてしまう。曾の魂は地獄に連れてゆかれて裁きを受け、種々の惨虐な刑罰を受けた後に、乞食の娘に投生する。後に妾に売られるが、盜賊を導き入れて主人を殺

したという冤罪をかぶせられて死刑に処せられようとし、悲しみと怒りで泣き叫ぼうとした時に、夢からさまされる、という長い篇で、その主題、構想は明らかに「枕中記」と類似している。魯迅は「中国小説史略」の中で、「志異」には唐人伝奇からの転化になるものがあるとして、その例に「鳳陽士人」とこの「続黄梁」の名を挙げ、蒲松齡がこのことをことわっていないのは、思うに古を模倣しながらもそれを諱むのであろう、と言っているが、魯迅はフォークロアの的な解釈力は全く欠けていた人だから、一つの話がそれ以前の話と酷似していると、直ちに模倣という意識で解釈し処理してしまったのだと思われる。しかし元来中国には「枕中記」のように夢の中で立身出世するという話がフォークロアとして「枕中記」以前から存在していたことが、「搜神記」の中に、単父県（今山東省済寧市）の楊林が焦湖の廟の玉枕の裂け目から枕の中の世界に入り、幸福な暮らしをするという話があること（魯迅）から、当然考えられる。このようなフォークロアが、その後長い間伝承されて民間に存在していて、その一つを採録したのが「志異」の「続黄梁」だと私は思う。そこには「搜神記」のものや「枕中記」のように枕に入るといふモチーフはみられないが、寺（廟）に入って眠って夢をみる、そのわずかな時間の夢の間に人世の無常を経験するといふモチーフはそのまゝにうけついでいる。女に生まれかわらせられるといふ後の方の部分も、魯迅的な考えからゆけば「杜子春伝」あたりの模倣ということになるが、これもやはりそのような説話が民間に伝承されていて、「枕中記」型の説話と習合したものと考えた方がよい。魯迅の模倣説のもう一つの例として挙げられている「鳳陽士人」（2）は、三人の人がそれぞれ同一の夢をみるという話で、自行簡の「三夢記」をまねたものと考えられているが、この二つの関係もやはり民間伝承の観点から考察すべきものと思う。

魯迅は右二篇のほかに、「志異」の「蛇人」（13）も、周春の「遼詩話」に附記されている「染荘社記」中の蛇の話とともに、「水経注」にみられる蛇の話に附会してつくられたものと、その「小説旧聞抄」に述べている。（3）これら三つの話は、人間に育てられた蛇がよく馴れるが、大きくなって人間の手をはなれると人をおそうようになるという筋のもので、「水経注」の話は六朝時代の武強県（現在河北省）のある湖の生成伝説であり、「染荘社記」のは金代の永平地方（現在河北省）の一村落の地名伝説である。「蛇人」は蒲松齡の故郷に近い所にすんでいた蛇使いの話で、人を襲った蛇が育ての親にいさめられるとおとなしくなるという点が「染荘社記」の話と共通し

ている。この三つの話のほか宋代の宋長白の「柳亭詩話」にも、山東西山の譚柘寺（現在の譚柘山岫雲寺であろう）に二匹の巨蛇がいて、寺の磬声を聞くことが記録されているし、また王梧溪の「題虎樹亭詩」の注にも、宋聰禪師が華亭（現在江蘇省）に住んでいたころ、二匹の人喰虎をならしたが、禪師が卒去すると二匹もまた相次いで死んだ、という伝説が記録されている。譚柘寺の蛇の名も華亭の虎の名もともに大青・小青であり、「蛇人」の三匹の蛇の名は、大青・二青・小青というふうになり、名の点でも関係が深い。華亭の伝説では蛇ではなくて虎であるが、このような変化相違は、民間伝承には常に見られるところである。以上五つの時代を異にした民間伝承の相互間には、かなり複雑な伝承関係があることゝ想像される。この五つの伝承の存在していた場所も地理的にみて隣接しているという点も、あるいはその伝承関係の大きな背景となっていたのかもしれない。

「紅毛氈」(4)は、いつの頃か明記していないで、紅毛人が中国にきて上陸することを許されず、たゞ一枚の毛氈をしく土地をくれとたのみ、承諾を得ると毛氈を引張りのばして、わずかの時間に数百人のものが入れるほどの広さにし、武器をもった人数が不意に襲撃して数里の地方を掠奪した、という話である。これがカルタゴを創立した王女チドの謀計の話と同類の話であることを、私は浅学にして知らなかったが、柳田国男氏の記述⁽⁴⁾によって、南方熊楠氏の随筆⁽⁵⁾にその考証があることを知った。それによると、「少許を乞て広い地面を手に入れる」話が、世界に広い分布をもった話であることがわかる。中国では「明史」に同類の話が記録されているから、「志異」所収のものはそれと民間伝承的なつながりがあるのかもしれない。

「画壁」(1)は壁画の美女に魂をうばわれた男が壁の中に入って女と情交するという、エロティシズムの濃い聊齋的な話だが、男と情交して一人前の女性になった女の髪の変化が画にあらわれる、という点は、「聞奇録」(逸書。「太平広記」に引用されている。)中の「画工」⁽⁶⁾の話の中の、画の中に女の生んだ幼児が新たにふえていた、という趣向と通じるものがある。たゞ女が画からぬけだして男と情交するという筋は「画壁」とは逆の趣向になっている。しかしこの二つの話なども、やはり民間伝承的には同類のものと考えべきものではないかと思う。私の涉獵が狭く、「聞奇録」のもの以外には類似のものを知らないが、広く調査すればほかにもいくつか資料が発見されるかもしれない。たゞここでは、男が画中の美女に魅せられて情交し、その結果絵画の方に変化があらわれるというモチ

「フの民譚がおそらく存在していただろうことを指適するに止めておく。

二、同時代の話との比較

この章では「志異」と同時代、もしくははたいしたへだたりのないころの類似した話との比較を項別にとりあげて列記することにする。

(1) 林四娘物語

「志異」の「林四娘」(3)は、山東青州道の觀察陳公宝鑰と幽鬼の女林四娘との愛情関係を中心に展開される話で、中国の幽鬼関係の説話に類型の多いものの一つである。その概略は次の通りである。

- 1、陳公のところへ若い美女林四娘があらわれる。公は幽霊だとは思ったが、その美しさをよろこび、観樂を共にした。
- 2、以後女は毎晩あらわれ、共に音律を談じ、時には公のすゝめで悲しい調べの歌をうたった。
- 3、公が身の上をたずねると衡府の宮女で難にあって死んだことを告げ、宮中の様子を話して嘆き悲しんだ。
- 4、女は夜は眠らないで金剛經の咒をとなえていて、もう一度来世に生まれたいと言った。
- 5、三年後、経咒を持誦していた功德で他家に投生することになったと別離を告げる。終りに悲しい歌をうたい、一篇の詩を残して姿をけしてしまった。

蒲松齡の同県先輩王士禛の「池北偶談」(「談異」七之二)の中にも同じく林四娘の話があるが、次のような著しい相違がみられる。

- 1、林四娘が生前任んでいた宮廷が荒れはてているために、陳公の役署を借りて客を招待しようとして、陳公の前にあらわれる。

2、女は一年あまりして別離を告げるが、それは泰山に行くからだった。

右の2の泰山に行くというのは、泰山府君が幽鬼の統領で、冥府がそこにあると考えられていたからで、この信仰は古くから民間にある。林四娘が残した詩でも、「志異」のものとして「池北偶談」のものでは著しい相違があるが、今は詳述を省く。「池北偶談」の話は王士禎が程周量から聞いて記録したものらしい。⁽⁷⁾

「楚辭燈」の著者として有名な林西仲に「林四娘記」という一文があり、林氏の附記によって江南（江蘇省）地方に流布していた説話であったことがわかるが、前の二話よりははるかに長いもので、その後半は前二者と類似するが、前半は前二者とは全く違う話になっている。その概略は次の通りである。

1、陳公が康熙二年に山東青州道の僉事になったが、夜になると役署の中で何物かがひどいさわぎをするので、下男に様子をみさせると、青面獠牙の恐ろしい鬼がいた。

2、以後陳公は兵を集めて役所を守ったが鬼は毎夜必ずやってきてひどいさわぎをし、武器をとって攻めたり神巫を使ってもふせぐことができなかった。

3、公は心配のあまり病牀についてしまうが、友人が事情をきいて鬼の驅逐を中止した方がよいと戒めている処へ、鬼があらわれ、それまでのふるまいをわびた。友人がその恐ろしい姿を変えて出なおしてくるようにと忠告すると、鬼がりっぱな服装をした美女となってあらわれた。

右の後は「志異」や「池北偶談」と酷似しているが、それでも次の諸点が違っている。

1、林四娘は一僕一婢を連れているが、その二人は影ばかりあって姿形はみえない。

2、陳公の処にあらわれたのは、同郷の誼による。

3、陳公の役署の文書の文書の手伝いをしたり、疑獄を処理したりする。また士の風采をみてその人物を見抜き、また陳公が商人から金の催促をうけて困っているのを助ける。

4、別れに臨んで詩を贈ったことは前二者と同じだが、その詩がしるされていない。

5、女はもと江甯府の官吏の娘で、父親が官物横領の罪で入獄した時、表兄いとこと協力して父の救助に尽力するが、出獄した父親から表兄との仲を疑われて、その潔白を知らすために縊死した。しかしその烈魂は散じなかった。

「志異」と「池北偶談」との話はともに山東地方の話であり、「林四娘記」の方は江南の話である。私の考えでは、林四娘物語は初め山東青州の陳公についての噂話（世間話）が山東各地に説話化して流伝した結果、それぞれ多少変化をともなったものになったのであり、「志異」と「池北偶談」との間の差異はそのためである。しかし全体としては酷似した話だった。ところがこの説話が次第に流伝して江南地方にまでゆくと、「林四娘記」の前半のような別の説話がそれに習合し、さらにその伝承の間に話の主人公の身分も衡府の宮女から江甯府の庫官の娘になってしまい、また種々の別の要素が加って、「林四娘記」にみられるような形になったのだ、と思われる。

(2) 前世譚

「邵士梅」⁽⁵⁾は蒲松齡が先輩高珩から聞いた前世譚で、「志異」にはこの篇の外に「三生」⁽⁶⁾、「四十千」⁽⁷⁾、「汪可愛」⁽⁸⁾、「陝西某公」⁽⁹⁾、「餓鬼」⁽¹⁰⁾、「蔣太史」⁽¹¹⁾、などの前世に關した話がみられる。これは中國の民間の話にはこの種のものが多いことを示すものかもしれない。「邵士梅」の概略は次のとおりである。

1、山東海甯の進士邵士梅が登州で、自分の前世に同じ村に住んでいた二人の人にあつた。

2、邵は二人と話をして、自分の前身が高東海という義侠の男で、わずかな盗みをした娼妓をかくまった罪で獄に入れられ死んでしまったことを知る。その死亡の日がちようど邵の生まれた日だった。

3、邵は後に前世に住んでいた妻子にあわれみをかけてやった。

「池北偶談」では前世を覚えていた妻子にあわれみをかけている人の名を「記前生」（「談異」七之一）中に挙げてはいるが、その中にこの邵士梅のことがしるされ

ている。そこには邵士梅が前世の住居に行つて妻子のために生活を謀つてやり子供に読書を教えたことと、邵が妻と三世にわたつて夫婦になつたことが極く簡単に書かれている。この妻と三世にわたつて夫婦となつたことについては同書の他の箇処〔談異〕七之五)に別に詳しく書かれている。「志異」のものと酷似した話には陸次山の「邵士梅伝」がある。これは浙江地方に康熙七年頃に盛んに伝承されていた話を次山が記録したもので、次の諸点で「志異」の話とは違つている。

- 1、邵士梅の前身は棲霞地方の高家庄のまじめな村長で、病死して青衣にみちびかれて済甯の邵家に投生した。
- 2、二、三才でよく物を言い、前世のことを話した。

- 3、成長して進士となり登州に赴任し、高家庄に行つた時、土地の人から自分の前身が自分の誕生日に死んでゐることを知り、事情を話して、前世での娘にあいにゆく。娘はその幼時のことをよく覚えていた。また村の古老をたずねて懐旧談をし、互いに喜びあつた。

- 4、士梅はそこで悟りを得、財産をなげ出して古老の家に手厚いほどこしをしてやつた。

右の三つの邵士梅物語から、私は邵士梅という人の前世について種々の事柄が語られていたことを知る。これはおそらく、邵士梅という人が前世のことを知つてゐるというので、民間にあつた種々の前世譚がみなこの人と結びついてしまい、邵士梅の前世譚なるものが当時さかんに語られていたものと推量される。

(3) 浄土の土を肉として再生する話

「湯公」(40)は哀枚の「統子不語」巻二の「牟尼泥」と同類型の話で、共に一度死んだ者の靈魂が冥界をさまよい、菩薩や釈迦の力で新しい肉体を与えられて再生するという民譚である。「湯公」の概略は次のとおりである。

- 1、湯公が臨終のとき、過去のさままゝのことが熱氣となつて下体から上体にのぼつてゆき、次にそのまま身体からはなれ、さいごにその靈魂は肉体からはなれて広い城外をさまよいあるいた。

2、一巨人が出現して公を拾いあげ袖の中に入れてが、公が念仏を唱えると袖から外に落ちた。巨人がまた拾いあげると、また念仏を唱えて落ちる。かくすること三回、巨人は公をそのまゝにして去ってしまった。

3、公の魂は西方に向い、途中であった僧の教えで文昌帝と孔子（この二人は士の生命を司っている）のもとにゆくが、文昌帝は公の肉体が腐蝕しているから菩薩の力にたよらねば再生できないと教えてくれた。

4、公が菩薩にあつて懇願すると、はじめはことわられるが、一尊者の助言があり、菩薩は法力を使って柳枝を骨とし浄土の土を肉とし、公の霊所に送って霊と合せると、公は再生することができた。

「牟尼泥」の方は、次の諸点が「湯公」と違っている。

1、湯公は母と二人ぐらしたった。

2、病死すると鬼卒が来て公の魂を東獄神のもとへ連れて行く。公は母が年とついで自分はまだ立身出世してないことをつけてあわれみをこうが、聞き入れられない。

3、公が悲しむと、神は「汝は儒生だから孔子のところへ行つて裁いてもらえ」と言う。

4、孔子のもとにゆくと「生死のことは東獄神の仕事、功名のことは文昌神の受持ち」と断られる。

5、悲しんでもどつてくる途中、普渡大士（釈迦）に出あい、懇願すると、孝行をめめて願いをきくとどけてくれる。

6、公の屍がすでに腐敗しているので西土から牟尼泥をとりよせ、善財童子に命じて屍の修繕をさせる。童子が屍の修繕を終えると、公の魂がその口から中に入って、公は再生する。

7、公は大士に貪淫輩酒の諸戒を守れば功名と長寿が与えられると言われるが、酒だけはやめられないけれど他の戒は守ると言う。

大士が進士にはなれるが禄位につく運がないから仕官してはならないという。果してそのことばどおり、公は知事の在任中に死んでしまう。

右の二つの間の一番著しい相違は、「湯公」の1、2の点と「牟尼泥」の1、2の点である。この後者の方は、幽界と現世との交渉

の説話（以下「幽明交渉説話」と呼ぶ）によくみられる型式である。

(4) 知事の冥府訪問

「鄭都御史」(4)と「子不語」巻一の「鄭都知県」とは、冥府の所在地として南方で信じられている四川省の鄭都に関する民譚である。一人の知事が地下の鄭都に行つて冥王に会つてくるという筋のものだが、この二話の間には民間伝承の常として相当の変化がみられる。「志異」の方の概略は次のとおりである。

- 1、鄭都県外の洞穴は閻羅天子の役署と呼ばれていて、その中の獄具は一切人民が供給することになっていて、その支出額は県の公簿に記載された。
 - 2、明の御史行台の華公が赴任してきたがそのことを信ぜず、人民のまどいを払おうと思つて、二人の従者をつれて自ら洞の中に入つて行った。
 - 3、深さ一里ほど行くと宏大な殿堂があり、りっぱな役人を見た。公はその男（冥王）からそこが冥府だといわれて驚いて逃げようとするが許してくれなかった。公が嘆願すると「某月某日、肉身を以て陰に歸す」としるされた巻物をみせられた。
 - 4、金甲神があらわれ、上帝からの大赦の書をもたらしため、冥王は公を現世に歸せうとし、帰路を示した。
 - 5、帰路の途中、道に迷っていると、赤面長髯の一神将があらわれ、光で道を照らしてくれ、経文を誦すれば無事外に出られると教えてくれた。公がその通りにすると道が明るくなり前進できたが、途中で誦経の文句を忘れてつまると忽ち暗くなつてしまった。経文を思い出してやっと公は外に出ることが出来た。
 - 6、二人の従者はどうなったのか、まったくわからなかった。
- 右にくらべると「子不語」の方の話はやや複雑な内容であり、次の諸点で前者と著しい相違をみせている。
- 1、鄭都への入口は県内の井戸である。

2、知事は清初の劉綱という人で、人民から、地獄に行つて錢糧を免じてくれるように鬼神に交渉してきてくれと依頼され、従者（幕客の読書人）を連れてゆく。

3、冥王にあって人民の頼みを告げると、冥王は「それは妖僧や悪道士の仕業だ」と言つて、人民の為に来た知事の義侠をはめる。

4、突然紅い光と共に伏魔大帝（関羽）があらわれ知事と話を交えるが、従者が気にさわる質問をしたため、大帝は怒つて去つてしまふ。冥王が従者を詰責して雷にうたれて死んでしまふと言ふと、従者は驚いて許しをこころ。冥王は彼の背中に玉印を押してくれる。

5、帰途につき鄭都の南門につくと従者は急病で死んでしまふ。まもなく雷電が従者の棺のまわりをめぐる。後でしらべてみると、従の衣服はほとんど焼けてしまひ、背中の印のある箇所だけが残っていた。

これら二つの話も前の「牟尼泥」のように、冥界に行つて、徳のおかげで許されて帰つてくるという、幽明交渉説話の型式の一つである。「志異」には、「考城隍」(1)、「阿宝」(2)、「鐘生」(7)など同じ趣向の話がみられる。当時民間に類型の多かつた話であつたと推察される。

(5) 義 犬 物 語

「義犬」(5)は淄川県の周村の商人某が蕪湖（安徽）に行つたとき賊に襲われ、危ういところを恩をかけた犬に救われる話である。これと似たものに「子不語」巻一の「伏波灘義犬」があり、広州地方の話である。ある商人が賊に殺されようとした時、酒を飲ませて殺してくれと頼み、箕巻きにして河に投げ込まれ、犬に助けられるという筋は「義犬」と全く同じだが、助けられた客が賊より先に賊の行くさきに行つて役人に届け出て首尾よく捕えるという所が、「義犬」では犬が主人を賊の隠れている舟につれていって、賊にかみつくという話になっている。この二話ともに明らかに動物報恩譚である。

上に示した話の外に、「池北偶然」中に同類の話があるものが七篇ある。対照すると次のとおりになる。

- (1) 「小獵犬」(5)……………「小獵犬」(談異七之七)
- (2) 「妾擊賊」(14)……………「賢妾」(談異七之七)
- (3) 「陽武侯」(14)……………「薛忠武」(談獻六之四)
- (4) 「五殺大夫」(14)……………「五殺大夫」(談異七之七)
- (5) 「斃石」(14)……………「啖石」(談異七之一)
- (6) 「張貢士」(15)……………「心頭小人」(談異七之七)
- (7) 「蔣太史」(16)……………「蔣虎臣」(談獻六之四)

右のうち、(2)(4)(6)の三話は「池北偶談」のものと叙次、内容の点で全く同じと言えるほどの一致を示している。これは「志異」と「偶談」とが同一の話を採録したか、あるいは「偶談」のものは王士禎が「志異」を読んで記録したものか、そのいずれかであろう。(5)は「志異」の方は噂話を記録したのであり、「偶談」の方は、王自身が自分の家の傭人のことを書きとめたものである。(1)(3)(7)の三つは、両者の間に多少の相違点はみられるが、とりわけて対照するほどのこともないものであるから、ここでは割愛する。また(1)と類似した一条が「纂異記」にあることが「椒生隨筆」にみえている。⁽⁹⁾したがってこの類の話も民譚として流布していたことが推察される。「塞償償」⁽¹⁰⁾と「子不語」巻一の「太菜上人」も同類の話であるが、これは現代の民譚にもみられるものだから次の章で触れることにする。

三、現代民譚との関係

中国の民俗学者鐘敬文氏は、以前その「中国民譚の型式」⁽¹⁰⁾の小叙の中で、中国の歴史の悠久なこと、地理の広博なことによって、民

譚の性質の複雑さと数量の豊富なことは、世界に冠たるものであり、その色彩の多様なことも歐洲のものをはるかに凌駕していることを強調した。この鐘氏の言っていることは、そのままに受けとって差支えないもの、と私は思っている。鐘氏が民譚の型式の草案中にとりあげた四十五の型式の話は、鐘氏も言うように、中国の「民譚の海の中の大きな波ではあるが、しかしそれらは此の海の中の大きな波の総てでない」ことは言うまでもない。このことは鐘氏の整理したものよりもはるかに多い二一五の型を整理したエバハルト氏 W. Eberhard の成果⁽¹¹⁾に対してもあてはまることばだろう。私はこの章では、鐘氏とエバハルト氏の研究成果や数は少ないながらも私が調査した資料をもとにして、「志異」の話と現代民譚との関係の面にわずかながらも照明をあててみたいと思う。

(1) 道術譚

「種梨」⁽¹²⁾ (1)は「志異」の中では一般によく知られている話だが、中国東北地方では民譚として流布していることが、高山信司氏の著書に述べられている⁽¹²⁾。道士が術によって奇蹟を示し、けちな人間をとちめるといふモチーフのもので、同類の話が古くは徐光が術を行なう話として「搜神記」に見えている⁽¹³⁾。「種梨」との相違は、術者がとりあつかったものが梨と瓜との違いだけで、あとはそっくりそのままの話である。したがってこの民譚は長年月にわたって民衆の間に生きつゞけてきた話である。

(2) 神氣無常の話

「柳氏子」⁽¹⁴⁾ (5)は四川省灌県の民譚「想念鬼子の老人」(息子思いの老人)と同類型の話で、山東の膠州の話である。その概略は次の通りである。

- 1、内閣秘書官の会計係をしていた柳西川が四十才で男の子を得て溺愛し、放任主義で育てたため、息子は放蕩者となって父のつくった財産を蕩尽し、病気になる、さいごまで父を困らせながら若死してしまった。柳は死ななばかりに悲しんだ。
- 2、三、四年後、同村の香社の人たちが泰山に登った時、柳の息子(実はその幽鬼)に出あい様子をたずねると、たゞ東奔西走して

いるだけだと答え、再会を約束して去ってしまった。

3、約束どおり香社の連中の宿屋にきた息子には、柳西川が慕っていることを告げられると急に怒った顔ををし、あう日時を指定して、柳に伝えるようにと言いい残して別れてしまった。

4、話を伝えられた柳西川は喜んで定められた日に宿屋にゆくと、その主人は、「神気無常」と世間で言うとおり、息子が父親に對して悪意をいだいている様子だから会うのはよした方がいい、もしもどうしてもあいたいというのなら、櫛の中にかくれて様子をうかがった上のことにするようにと注意した。

5、柳は主人の言ったとおりに櫛の中にかくれていると、息子がきて柳の来否を聞き、来ないと言われて怒って柳を口ぎたなく罵った。主人がとがめると、息子は、あんなやつは親爺じゃない、懇意にしているうちに悪い気を起して自分が苦勞してためた資本金を取ってしまったって返さなかったのだ、今日こそやつつけてやろうと思つたのに、と言いい、捨科白を残して去って行った。

6、柳は櫛の中で恐ろしさに冷汗をながしてふるえていたが、主人に呼ばれてあたふたと帰って行った。

このようにこの話は實在の人、實在の土地と結びついたものになっているが、「想念児子的老人」の方は、登場人物が「ある老人」、「その息子」というように表現され、またわが國の昔話の冒頭にみられる「むかしむかし」にあたる「従前」という語を以てはじまっている。そこには「柳氏子」の場合のように信ずべき話としての眞実性はみとめられない。比較のためにその概略を示すと次の通りになる。

1、むかし、妻に死別して一人の息子しかいない老人がいた。二人は互いにたよりにしあい愛しあつて、不幸にも息子は急病で死んでしまった。老人は心に大きな打撃をうけたが、子を思う情はかえって強まり、あげくのはてには、息子は死んだのではなく、どこかよその國へ旅立ったものと信じこみ、行きかう旅人に息子の消息を尋ねていた。

2、陰陽界から来た旅人がその地方に息子がいると話したので、老人は喜んで支度をととのえ、わが子をたずねに出かけた。陰陽界とは人間と幽鬼とが一緒に住んでいる地方で、明け方から夕方までは人間の世界だが、晩になると鬼の世界となる。しかもその鬼

は非常に凶暴であったから、人々はこれと交渉をしないで、戸を閉してその横行にまかせていた。

3、老人は苦しい思いをした後にやっと陰陽界に着き、城内の宿屋に泊って主人に事情を話した。主人は、人間は死ねば親子の関係などは忘れてしまうものだから、息子をさがしてもむだだ、といさめるが、老人にはそれが信じられなかった。

4、夜になると老人は主人がとめるのもきかずに息子をさがしにゆき、河のほとりで見つけたので、父であることやそれまでの事情を残らず告げたが、息子はどうしても納得しなかった。老人がくどく言うとしまいには怒り出して、たゞ老人の宿屋の部屋番号を聞いたゞけで、三更頃にゆくからと言いのこして立ちさってしまった。

5、老人が失望してもどって主人に話すと、主人は今夜は会わないほうがよいと言い、老人が聞こうとしないので、老人に隣りの部屋から様子を見させることにし、老人の牀の上に東瓜を置いて老人がねているように見せかけた。

6、約束の時刻になると、息子の鬼は頭を紅い布で包み、身に短衣をまとい、腕をまくりあげ、片手に殺人用の刀を握った兇悪ないでたちで部屋に入ってきて、いきなり刀で牀上の東瓜をめった斬りにして出て行ってしまった。

7、老人はすっかり気がとおくなってしまい、やがて主人にすゝめられてすぐに帰途についた。それから後は、息子を思う気持には変りはなかったが、二度と会いたいとは思わなかった。

「柳氏子」では息子は父親柳西川に以前ひどい目にあわされた人間の生まれかわりで、死んでも恨みをあくまでもはらそうとする。これは一種の因果応報譚ではあるが、「想念児子の老人」のような「神鬼無常」型の民譚が応報譚の衣を着てあらわれたとみるべきだろう。

(3) 僵尸譚

「尸変」(13)は山東済南道陽信県に起った僵尸が人間を襲撃した話である。女の死体の置いてある部屋にとめられた四人の客のうち三人が僵尸に息を吹きかけられて死に、残りの一人が必死に逃げて追かけられたが、やっこのことでのがれたという筋である。蒲松齡の

小説的描写力はまことに美事で、尸変（僵尸が人間を襲うこと）の恐ろしさを迫力をもってえがききっている。高山氏の報告では東北地方で鬼の話として多いのはこの尸変に関するものだと言う。⁽¹⁵⁾高山氏の紹介している話も「志異」のこの「尸変」に非常によく似ている。エバハルト氏のあげた民譚型式の「死神追跡」⁽¹⁷⁾型のモチーフは、

- 1、一人の男が夜、死神と交渉をもつ、彼は逃げだす。
 - 2、死神が彼を追跡する。
 - 3、最後の瞬間に男は救われる。
- となっているが、「尸変」は明らかにこの型の民譚である。⁽¹⁸⁾

(4) 漁夫と水鬼の交際

「王六郎」⁽¹³⁾は蒲松齡の故郷の属している山東淄川県の話である。漁夫の許という男が仕事をするたんびに酒を大地にそいで溺死者の幽鬼をなぐさめたよめに、その幽鬼の一人王六郎があらわれて許の仕事の手伝いをしたり、酒をのみあって交友をむすぶが、この六郎は自分と入れかわって死ぬはずの婦人とその幼児を救い、その功で土地神になる。すると許が遠路わざわざその土地まで王六郎にあいにゆく、という筋であるが、鐘敬文氏のあげた「水鬼と漁夫」型に属する民譚である。この型式はエバハルト氏も「漁夫と水鬼」⁽¹⁹⁾としてあげている。両氏のモチーフの書き方には多少の異同があるが、より詳細な鐘氏の方をあげると次のとおりである。

- 1、或漁夫が水鬼に手伝わられて裕福に暮す。
- 2、水鬼が彼に別れを告げて云うのに「自分は人間に生れ変ろうから」と。
- 3、漁夫が彼の計画を破り（又は水鬼が自分の計画を実行せず）行かれない。
- 4、水鬼が土地の神或いは城隍となって再び彼に別れを告げる。
- 5、彼等が其の時から一度再会し、又は又と再会しない。

エバハルト氏の挙げている資料をみると、この型の民譚が、山東、江西、福建、広東などの地方に広く流布していることがわかる。

(5) 心臓や顔をとりかえる話

「陸判」(1)は安徽省陸陽県の話である。地獄の表象と中国民衆に信じられている十王殿にいる冥府の属官の陸という判官が朱という大胆な士と交際し、朱のために心臓のとりかえ手術をして利口にしてやったり、朱の願いでその醜い女房の首を美女の首とすげかえたりし、朱の死後も交際を続けるという筋である。「志異」の中でも屈指の興味ぶかい物語で、話の種類としては「王六郎」と同じく幽明交渉説話に属し、エバハルト氏の挙げて「幽霊裁判官」型の民譚である。同氏のあげているモチーフは次の通りである。

1、数人の仲間たちがより集って賭けをする、「誰が夜、町の神廟の中へ入ることができるか、そして大王(冥府裁判官)の前で酒を飲めるか。」と。

2、一人の勇ましい男がそれをやる。大王は彼と酒を飲む。

3、彼等は友達になる。

4、大王は友情からその勇ましい男の不貞な妻の性格をあらためようとする。

5、ある夜、その妻の心臓をほかの心臓と交換する。

6、後に彼は彼女の顔までもほかの顔と交換し、それによって彼女は美しくなる。

7、その顔の前の所有者はちょうど死んだばかりの娘の顔であった。

8、その娘の家族は、その後でその勇ましい男の家族と交際する。

9、大王は死ぬまで勇ましい男と親交を続ける。

「陸判」では右のうち1、2、3、6、7はそのまゝそなわっているが、4、5、9が相違点を含み、8はない。エバハルト氏はこの「陸判」一篇を資料に採用しているが、もう一つの資料の浙江省のものでは、おそらく右のモチーフ通りになっているものと察せら

れる。

(6) 動物に投生して報恩する話

「賽償債」(13)は、蒲松齡の村の李公（「捉狐射鬼」(14)の主人公）の家の傭人某が驢馬に投生して旧恩に報いる話で、その筋は次の通りである。

1、李公の家に居候をしていた某は貧しかったので、李公の家の用人をして沢山の報酬を受けていた。
2、ある時、公から豆一石を買う代金を借りて、それをもと手にして生活を立てようとしたが、まもなくそれも使いはたしてしまつた。しかし公はその貧窮を憐れんで追求しなかつた。

3、三年後、公が寺で読書していたある晩のこと、夢の中に某があらわれて、恩返しをすと言つて去つてしまつた。眼がさめて公はふしぎに思い、家人にたずねると、公の家の驢馬が子を生んだというので、きっと某が生まれかわつたのだと思い、その驢馬をかわいがつてやつた。

4、ある内監がその驢馬をみて大金で買ひとろうとしたが、公の急用のためまともになかつた。翌年その驢馬が傷ついた時治療した医者が、驢馬をうって代金を半分さしあげたいと言つた。数年後、その金を公によこしたが、それはちやうど以前に某に貸した豆の代金と同じだつた。

この話はエバハルト氏の挙げている「借金の懲罰」型(21)に属するもので、そのモチーフは次のとおりである。

1、生前に借金を返済しなかつた人間が、獣または児童として金を貸した者の家に生まれかわる。
2、彼（獣または児童）が、その働きか、または売却によつて負債額に等しい金額をもたらず。

「子不語」巻一の「大楽上人」も同類の話で、河南省の民譚の記録である。李公に相当するのが金持の僧であり、負債者の投生した驢馬をある客が一晩でよいかからかしてくれといつて驢馬にとびのり、代金を放り出してゆくところ、が「賽償債」とちがう点で、

そこに民譚としての変化があらわれている。

(7) 竜女と結婚する話

「西湖主」(8)は江西省の話で、中国に多い人間と竜女との結婚する内容のものである。その概略の筋を示すと、

1、陳秀才が洞庭湖で傷ついた竜をたすけた。

2、後に洞庭湖で大風のため遭難し、僮僕とともにある島に流れついた。そこで美女の騎馬隊に会い、西湖の王女の狩獵としらざれ、遠くに避けるよう忠告された。

3、二人は林の中に宮殿をみつけ、ためらいながらも中に入ると、はからずも西湖の王女が鞭鞭で遊ぶのをかいまみてしまい、王女に思いをよせて、残された手巾に詩を題してしまった。そのため危うく一命を落しそうになるが、王妃があらわれて陳をみると、突然恩人だと言い出して手厚い款待をした。

4、王妃は王女を陳と結婚させた。陳は王女の口から、はじめて王妃が自分の救った竜神であることを知った。

5、陳の故郷では陳が死んだものと思っていたが、突然僮僕がもどってきて陳の生存を知らせた。半年ほどして陳もりっぱな身なりでもどってきた。

6、以後陳は豪華な生活をおくった。洞庭湖を通った友人が美しい船にのった陳にであい酒を飲みあったが、帰郷して陳の家に行ってみると陳がいるので、洞庭湖であったことをきくと、そんなことはないかと否定された。一同はふしぎに思ったが、陳が死んだ時、棺があまりに軽いのであやしんで開いてみたら、中はからだだった。

この話が鐘敬文氏の挙げている「如願型」(如願とは願いが叶うという意味の女性の名)にあてはまる説話であることは、次に示すそのモチーフを見れば明らかである。

1、或る人が竜女の皇太子、又は内親王を救う。

2、竜王が其の徳に報いん為に部下を遣して彼を竜宮に迎える。

3、彼が或者（皇太子又は内親王）の密囑によって、王に或物を索める。

4、彼が遂に美しい妻、又は莫大な財富を得る。

エバルト氏も「竜王が願いを叶える」型として鐘氏のあげた四つのモチーフとほとんど同じものを示しているが、3のところ「王の家来又は子供の勤めに従って彼は何か願いを言う。」となっている。「西湖主」では右の両氏の示したモチーフの1とちがって、竜王の王妃を救うことになっていることとモチーフの3が欠けていることがわかる。これは民間伝承における変化として、やはり注目しておくべき点である。

(8) 仙郷淹留の話

「賈奉雉」(10)は中国製リップ・ヴァン・ウインクル物語である。その筋の概略は次の通りである。

1、不遇の秀才賈奉雉が郎という姓の秀才と交際した。郎は賈が軽視しているような下等な八股文を術をつかってむりやりに賈に覚えこませ試験に及第させたが、賈は恥じて、俗世をはなれて山中に身をかくす決心をした。

2、郎に連れられて山中に入り、郎の師について修行することになったが、師の術でためされて俗念を断つことのできないことが暴露され、郎にもすすめられて家に帰った。

3、帰ってみると、いつのまにか百年もたった。親族からひどいあつかいをうけた賈は、決心して最初から受験をやりなおし、ついに進士に合格して大官になり、富貴をきわめるが、親族たちがこんどは賈の勢力をかさにきて横暴なふるまいをし、訟訴事件をおこしたりし、賈は遼陽の軍役にあてられることになった。賈は榮華のむなしさを悟ったが、海岸にいくると郎が舟で近づき、その姿をみると賈は驚喜して舟にとびのって、いずこともなく姿を消してしまった。

仙郷淹留の説話は中国には古来非常に多く、しかも多様な色彩を呈しているものである。「賈奉雉」にみられる術者の試験にあう部

分は、唐の「杜子春伝」その他にいくつかみられるやはり民譚の一型式で、仙人修行譚に入る話である。エバハルト氏はその「光陰は流るる」型⁽²³⁾の中にこの「賈奉雉」を入れているが、同氏が示している次のようなモチーフのものは、「賈奉雉」より単純なものである。

1、一人の男が仙人たちに洞窟であう。

2、彼は仙人たちと談合し、あるいは彼等を傍らで眺めている。

3、洞窟から並び出た時には、多くの年月が経っていた。

このモチーフにびびったりのものは「述異記」、「列仙伝」などにみられる王質の物語をはじめとして相当に多いが、「賈奉雉」のような話は、仙人修行譚が習合した形のものともみることができよう。

以上(1)から(9)まで、現代の民譚と「志異」の話との対照、考察をしたが、「志異」の他の多くの篇がどういう型式の民譚と同類のものか、現在までのところ対照させるべき資料の関係で、十分な考察をするには困難を感ぜざるをえない。エバハルト氏の挙げている「超自然的懷妊」型⁽²⁴⁾や「飛行布」型の資料の中に「志異」中から二篇⁽²⁵⁾をとりあげているが、これはどうも妥当ではないように私には考えられる。また「蕙芳」⁽¹⁰⁾は山東省青州の話で、馬という樸訥な男のもとへ天女がおしかけて女房になり男に富と幸福とを与えるという、「搜神記」の董永に関する話⁽²⁷⁾と同類のものである。蒲松齡は主人公の馬にあっていて、この一篇の終りには、「現在馬は六十余りで、その人柄はただ樸訥なだけであり、ほかにこれと言った長所はない。」と誌しているから、実際におこった話のように伝えられているのだから、これはきつと古くから「天女のおしかけ女房」型⁽²⁸⁾とも呼ぶべき民譚があったのだからと思う。この型をば「羽衣伝説」の類型と考える向きもあるが、私は同じく天女に関する話ではあっても、別の独立した型とみた方がよいのではないかと思っている。そして、現在でも相当広く分布しているのではないかと想像されるが、明確な資料に接していないので、断定はしばらくさし控えて置きたい。

今後、中国民譚の型式がいままでよりはるかに広範囲に亘り、かつ全体的に統一して体系的に研究された暁には、「志異」の物語の

民譚としての面がいまよりもはるかに明確に把握されるに違いない。

終りに一言触れて置きたいのは、「志異」中の狐の説話と幽明交渉の説話のことである。「志異」の民間伝承的考察としては、是非ともこの二つをおろそかにすることはできないと思う。私もすでにある程度までの研究はしてきたが、いま一つ不充分と思われるし、とくに狐の説話については「太平広記」所収のもの以外はまだそれほど調査が進捗していないし、それに与えられた本論文の紙数にも満ちるので、またの機会にその方面の成果をまとめることにしたいと思う。

後 記

私が「聊齋志異」の民間伝承的考察をはじめたのは二十年前のこと、今は亡き凱南奥野信太郎先生のお勧めによるものだった。先生はこの研究が「志異」研究の重要な一分野であることを強調されていたが、この度先生の遺文を整理した時、はからずも「志異」の物語の特色が蒲松齡の民譚採集によって生じたものであることを述べられた一文を発見した。これは先生御自身が印刷になったものを切り抜かれて保存されておかれたもので、「聊齋志異」と題し、その下に「東亜古典研究」と誌されているものである。このことから戦争中に書かれた一文であることはたしかと思われるが、現在までのところ、その掲載誌が何であったか、調べがつかない。その次の記述は、先生が私に民間伝承的考察を勧められたものになっているとお考えであった。

「およそ民譚の一番大切な特徴といえば、その中に現われてくる樹木でも花でも微風でも狐狸でも、そのすべてがわれわれの生活感情のなかに生きていくものでなくてはならないということである。従って樹木の空洞が太い低音で話しかけてくるとき、花が愛嬌よく微笑するとき、われわれは畏怖や懐疑の念を起す代りに、端的に親しさを感じることが出来る。民譚、昔ばなしの尊さはまことにここにあるといわなければならない。」

この一文は先生が「志異」について専述された唯一の文章という点で、「志異」研究を先生から勧められた私にとっては、まことに得難いものと言わなければならない。この一文を読み、先生亡き現在、ひとしお深い感慨をもよおざるをえない。私が亡き先生の追悼論文集の意味をももなったものと考えられる本号の論文として聊齋民譚考をとりあげたのも、以上のような因縁があるからにはか

ならない。できあがったものは充分に満足のゆくものではなく、先生に対してもはずかしい思いがするが、以前にみて頂いた研究成果に多少なりともその後の新しい成果を加えることができたことを、自分自身、慰めとするほかはあるまい。

- 注 1 「聊齋志異研究序説」(「芸文研究」Ⅲ所収)。
- 2 この話は今本「搜神記」にはみられず、「太平實字記」二二六に引用されている。
 - 3 「小説旧文抄」(一九五二年人民文学出版社本) 九七頁「聊齋志異」の項。
 - 4 柳田国男著「伝説」(岩波新書) 一一三頁。
 - 5 南方熊楠著「続南方隨筆」(岡書院) 二二二頁。
 - 6 「太平広記」巻二八六幻術類三所収。
 - 7 林四娘の残した詩の前に誌された「有詩一卷長山李五絃司冠有写本又程周量会元記其一詩云」という記述から推察される。
 - 8 「康熙六年補任江南駅伝道為余述其事属余記之」。
 - 9 記述中には「小官人」とあるが、これは「小獵犬」の誤り。
 - 10 「民俗学」第五卷第一一号所収。
 - 11 *TYPEN CHINESISCHER VOLKSMÄRCHEN, HELSINKI 1937.*
 - 12 「満洲の故事と昔話」(昭和一八年拓文社) 一七六頁。
 - 13 「搜神記」二〇巻本卷一所収。
 - 14 「民間文芸週刊」(国立中山大学語言歴史学研究所編刊) 第五期所収。
 - 15 「満洲の故事と昔話」一五〇頁。
 - 16 「満洲の故事と昔話」一五三頁。
 - 17 *Typ 114: Verfolgung durch einen Totengeist (原本一七二頁)。*
 - 18 *ホンノト氏の著げた資料のよき Liao-chai chih-i とあるだけでその篇名は誌されていない。*
 - 19 *Typ 132: Der Fischer und der Wassergeist (原本一九一頁)。*
 - 20 *Typ 133: Der Geisterriecher (原本一九二頁)。*

- 21 Typ 146: Bestrafung von Schuld (原本二〇〇頁)。
- 22 Typ 39: Der Drachenkönig erfüllt einen Wunsch (原本六四頁)。
- 23 Typ 103: Die Zeit vergeht (原本一五六頁)。
- 24 Typ 51: Die übernatürliche Empfängnis (原本九一頁)。
- 25 Typ 183: Das fliegende Tuch (原本二三八頁)。
- 26 Typ 51 又は「雷曹」(6)を「Typ 183 又は「仙人島」(8)をそれぞれ資料にしているが、これら二型式にあげられているモチーフは、いずれも「志異」の二篇ではわずかな部分しか占めていないので、エバハルト氏のようにこの二篇をこれら二型式の資料としてあげることには躊躇せざるをえない。
- 27 「搜神記」二〇巻本卷一所収。
- 28 竹田 晃訳「搜神記」(平凡社・東洋文庫本)解説―三九三頁―。